



S. T. コウルリッジの「老水夫の歌」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 栄子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/679

S. T. コウルリッジの「老水夫の歌」について

安 藤 栄 子

On S. T. Coleridge's “The Rime of the Ancient Mariner”

Eiko Ando

Abstract

The first edition of *Lyrical Ballads* (1798) opened with “The Rime of the Ancient Mariner”. W. Wordsworth, who discovered the poem did not get ready acceptance from contemporary readers, transferred it to inferior place, and moreover added the four ‘defects’ of the poem in the second edition (1800).

In this paper, first of all, I would like to examine each of Wordsworth’s criticism of the poem and how the criticism would be appropriate. Secondly, I would like to prove that Wordsworth’s criticism seemed not be exactly adequate.

I think, “The Rime of the Ancient Mariner”, including the supernatural and other complicated elements, seemed to be above Wordsworth’s comprehension. Coleridge describes in his poem ‘soul’s travelling’ through an ancient mariner’s voyage, claiming his religion to be unique and broader than Christianity.

(序)

Lyrical Ballads 初版 (1798) の冒頭を飾った “The Rime of the Ancient Mariner” は、S. T. Coleridge の傑作であり、イギリス Romanticism を代表する作品である。ところが、出版当初は意外と不評であり、W. Wordsworth は、第2版で、以下のように批判した。

The Poem of my Friend has ended great defects; first, that the principal person has no distinct character, either in his profession of Mariner

er, or as a human being who having been long under the control of supernatural impressions might be supposed himself to partake of something supernatural:secondly, that he does not act, but is continually acted upon:thirdly, imagery is somewhat too laboriously accumulated.¹

Wordsworth が述べた、この詩の 4 つの欠点を要約すると、次のようになると思われる。

1. 主人公の老水夫は、水夫として目立つ働きもせず、また、あれほど長い間、超自然的な力に支配されたにもかかわらず、そのような力を身につけた人間として描かれていない。
2. 老水夫は、いつも自分から行動せず、外から行動させられる。
3. 必要な関係のない出来事は、お互い何の効果も生まない。
4. イメジャリーは、わざとらしい印象を与える。

この小論では、Wordsworth の批評を参考にし、この批評がたして妥当性があるのかどうかを探り、その結果、この詩の主題が一体何であるのかを追求したいと思う。

(一)

Wordsworth は、第 1 と第 2 の批評で、ことさら老水夫の無能、没個性を暴きたて、彼を不能の老人扱いするが、そのようなことよりも、もっと大切なことは、なぜ老水夫が無能に見えるように描かれているのか、ということであろう。そしてさらにもう一步踏み込んで、我々は次のような素朴な疑問を、もっと重視すべきではないだろうか。すなわち主人公老水夫をはじめとして乗組員全員になぜ固有の名前がないのか、船にも名はなく、この無名の船が何という港を出て、どのような目的でどこへ行こうとしているのか、これらの問いに、Coleridge は口をつぐんでいる。この一切が不明であるという不気味な事実こそは、この航海が、マゼランやコロンブスの航海のような歴史に名を残す性質のものではなく、きわめて内面的な意味をもつことを示唆しており、それは、

魂の遍歴を意味するのではないと思われる。Wordsworth は、老水夫には超自然的な面はない、と言うが、この詩の第 1 部で繰り返される老水夫の異様に光る目は、第Ⅶ部で言及される彼の悪魔のような形相とともに、彼がただならぬ超自然的な風貌と力とを兼ね備えた人物であることを示しているといえよう。実際、光る目 ("glittering eye") のこの老水夫は、その眼力で一人の結婚式に行こうとしている若者を捕え、海上で自ら体験した恐怖に満ちた話を聞かせようとする。初めは強く抵抗するが、若者は、老水夫の光る目に魅了され、最後までおとなしく話を聞く。そして第Ⅶ部では、この若者が、老水夫の話を聞くことで精神的覚醒をなしとげたことが示唆されているのである。ことことは明らかに、老水夫には、超自然的な力がある、ということであり、Wordsworth の批評は、的はずれと言わねばなるまい。彼はさらに、老水夫の水夫としての能力を疑っているが、これもおかしい。第Ⅶ部で、老水夫を救助にきてくれた小舟には、水先案内人、見習いの少年が乗っているが、2 人とも老水夫を悪魔の化身と思いこみ前者は卒倒し、後者は気が狂うのであり、したがって小舟をこぐ人がいなくなる。すると、この一番大切な時に老水夫は、水夫としての力を大いに発揮し、老水夫を救いにきた人々を乗せ、無事に陸までこぐのである。この重要な点を Wordsworth は見逃している。

第 2 の批評で Wordsworth は、老水夫は全くの受け身の人、あるいは無能な者のように考えているが、そうであらうか。この作品中最大の行為である信夫^{あほう}翁殺しは、他ならぬこの老水夫が行ったことである。彼が無能に見えるのは、犯した罪を自覚することで内省的とならざるを得ないからである。このような重要な点を Wordsworth は見逃している。

ところで、Barbauld 婦人との対話で、Coleridge は、この詩をアラビアン・ナイトのような運命の偶然による物語程度の作品にするつもりが、当初の意図とはなれ、moral な面が強調された、と述べている²。このことはつまり、信夫翁殺しという罪が、この作品の中で大きな意味を持つことを示していると言えよう。

それでは、信夫翁殺しは、キリスト教の原罪を意味するのだろうか。当然の

ことながら多くの英国の詩人達と同様、Coleridge も聖書に造詣が深く、この詩とはほぼ同時期に“Wanderings of Cain”という作品に着手しており、旧約聖書のカインとアベルの物語に深い関心を示していたと言える。聖書では、兄カインが、弟アベルを激しい嫉妬心から殺害するのであり、彼は地上の放浪者となる（創世記第4章）。このカインによる弟殺しは、カインがアダムとイブという両親から受け継いだ原罪によるといえよう。

一方、老水夫の方は、カインのようなはっきりした動機もないのに、信夫翁を石弓で射殺したのである。しかも、殺された鳥には両義性がある。すなわち、「キリスト教信者の魂」と呼ばれる無垢の面と、南極の精霊の寵児としての悪魔的な面である。このことからこの鳥を殺すことが、道徳的に善なのか悪なのか判断するのは不可能のように思われる。加害者の理由のなさや被害者の曖昧性とは、この鳥殺しの罪が、キリスト教に限定されなくとも、我々一人一人の心に潜む egoism から起こる全く無責任な気まぐれのものと言えるのではないだろうか。大切なことは、鳥殺しを契機に、老水夫の心に罪の意識が芽生え、このことが、彼の認識を徐々に深いものに育てあげてゆく、ということなのである。

(二)

次に Wordsworth がこの詩の第3の欠点としてあげた批評に移りたい。これは、いいかえると、相関関係の希薄な出来事、つまり、一貫性に欠け、因果関係が明確でない出来事は、なんの効果も上げない、ということであろう。Wordsworth 自身は具体的に指摘していないので、これに相当すると思われる箇所を以下に5点あげることにする。

1. 信夫翁を殺したのだから、彼が死んでも当然であるが、実際に死ぬのは乗組員たちであり、ここに、因果関係は成り立たない。
2. 海蛇が、老水夫の摘みの解放をもたらすといわれるが、その因果関係は明白ではない。
3. 信夫翁の復讐を果たそうとする南極の精霊が、目的を遂げないうちに南

極に帰るのはなぜか。

4. 悪魔のような形相の老水夫が、若者に残すメッセージは、「愛と祈り」という一見キリスト教的なモラルのように見えるが、ここにも明確な相関関係は存在しない。
5. 婚礼に行く予定の若者は、結婚式になぜ背を向けるのか。
1. について、既に言及したように、信夫翁を殺すことで、老水夫は急速に罪の重さに目覚めていく。

And I had done a hellish thing,

And it would work 'em woe:

For all averred, I had killed the bird

That made the breeze to blow.

Ah wretch ! said they, the bird to slay,

That made the breeze to blow !

(part II)

一方、他の乗組員たちはどうか。上の引用にあるように、そよ風を吹かせた鳥を殺したと言って、老水夫を責めたてる。ところが、霧とかすみが晴れると

Nor dim nor red, like God's own head,

The glorious Sun uprist:

Then all averred, I had killed the bird

That brought the fog and mist.

'Twas right, said they, such birds to slay,

That bring the fog and mist.

(part II)

と、老水夫の行為を肯定する。なぜなら、霧とかすみをもたらしたのはあの鳥

であり、それを殺すことで、霧とかすみが晴れたのだから、老水夫は正しいことをした、というのである。彼等は、この一貫性のない日和見主義のゆえに、実質的には老水夫と同じ罪人なのである。しかし、本人達に罪の意識がないので、認識は少しも深まらず、Coleridge の「悟性」³に留まる人間なのであろう。無責任な無知のゆえに、実際に鳥を殺さなくとも、彼等は罪人として死んでゆく運命にある。これに対し、老水夫は、死は免れることはできたが、死神より恐ろしい「死中の生」という魔性の女の手になやまれ、生きながら死の淵をのぞくことになる。そしてそれが、罪の意識を一層敏感にさせ、救いへと導くことになる。老水夫は、ちょうど「ヨブ記」のヨブのように、神に選ばれ試練に耐え抜く稀有な人物のようである。

2. の海蛇についてであるが、罪を犯した直後の老水夫の目には、海蛇は、腐敗する海を泳ぐ、うとましい物にすぎなかった。

The very deep did rot: O Christ !
That ever this should be !
Yea, slimy things did crawl with legs
Upon the slimy sea.

(part II)

しかし、老水夫が祈りを思い出すなど、色々と心の変化を見せ始めると、月が彼の導き手となり、導かれるままに、目の前に泳ぐ海蛇の群れを見る。

Within the shadow of the ship
I watched thier rich attire:
Blue, glossy green, and velvet black,
They coiled and swam;and every track
Was a flash of golden fire.

(part IV)

海蛇は、青、緑、黒といった落ち着いた色合いのつややかな衣装を貴婦人のように着こなし、妖しげな蛇体を、腐敗の進む紅に燃える海の中でくねらせる。彼は、海蛇の官能的な美しさに圧倒され、海蛇がこのようにまばゆいばかりに美しい存在であることをはじめて知った。この海蛇の美への賛美が海蛇へのあつい愛となって思わず進むのである。

O happy living things ! no tongue
Their beauty might declare:
A spring of love gushed from my heart,
And I blessed them unaware !
Sure my kind saint took pity on me,
And I blessed them unaware.

(part IV)

すると、罪のしるしとして老水夫の首にかけられたあった信夫翁の死体がずるりと首からはずれて、海の中へ沈んでいくのである。これは、老水夫の罪からの開放を意味すると言えよう。

ところで、周知のごとく、キリスト教では罪からの解放は、イエス・キリストの贖罪による。キリスト御自身は全く無罪でありながら、我々一人一人の罪を一身に背負い、十字架に死ぬが、復活することで、救われたい我々に救いの道を示して下さったのである。

これに対し、老水夫が救われるプロセスに、イエス・キリストの贖罪は全く描かれていない。彼は、海蛇の美に目覚めることによって救われたのである。つまり、耽美主義が、魂の救いという宗教と一致したのであり、ここに Coleridge の Romanticism の特色が示されていると思われる。

それでは、3. の南極の精霊について述べよう。南極の精霊はわが子のように可愛がっていた信夫翁を殺されたことで、ギリシャ神話の復讐の女神のよう

に、老水夫の乗った船の後ろを執拗に追ってくる。超自然的存在である精霊は、老水夫の目には見えないが、彼が罪を犯したことで非常に苦しみ、後悔していることを知っているはずである。老水夫には天使という救いの力が天から送られ、これが既に死体を動かして船を進めている。そこにさらに復讐のためとは言え、南極の精霊の海を動かす力が加わり、船はさらにスムーズに前進することができるのである。ここで、はからずも天の力と地獄の力とが一つになってそれが大きな救いの力となっているのである。ここで南極の精霊は、恨みを多少は残しながらも復讐の心を少しずつ弱め、南極へと帰るのであり、老水夫への復讐、憎悪が少しずつ薄らいでゆくようである。

それでは、4. の老水夫が語るお別れのメッセージについてのべることにしたい。彼は、

He prayeth best, who loveth best
All things both great and small;
For the dear God who loveth us,
He made and loveth all.

(part IV)

と若者にのべる。ここで老水夫は、森羅万象を最高に愛する人が最高に祈る人だという。なぜなら神が森羅万象を創造し、愛するからだ、という。万物を愛することが、神への祈りとなるということは、万物の背後に神を認めることであろう。鳥を殺すことで自然と分裂し、神から見捨てられ、悪魔のような顔になるほど苦しんだはてに、老水夫は海蛇の美に感動し、海蛇の背後に神の存在を認識したのである。このメッセージの中で言及される神は、自然神教の神のように、自然に内在する神であり、W. Wordsworth が “Lines Written a Few Miles above Tintern Abbey” の中で、森羅万象の中を流れる “A presence” と親しみをこめて歌う神的存在とほとんど同一のものであろう。ここでは、キリスト教の禁欲的な倫理感は影を潜め、人間の情意を肯定し、海蛇の「蛇」に象徴される悪をも含めてすべてを愛そうとするより広い倫理感があると思われる⁴。

この真理を老水夫は、自然との葛藤を通して学んだのである。

さて、5. についてであるが、若者は老水夫の話の真意を知ると、結婚式というこの現象界の幸福に背を向けるのは当然であろう。彼はその後“A sadder and wiser man”に生まれ変わったと言われる。最初はこの若者もあの乗組員達と同様に現象界のみに関心があったが、老水夫の話を通し、現象界の背後に超自然的な世界が存在することを認識することができたのであり、この若者も老水夫とともに、Coleridge の言う現象をこえることのできない「悟生」から、現象をこえて真理をみる「理性」⁵へと認識を深めることができたと言えよう。

(三)

それでは、最後に、Wordsworth の第4の批評である、イメジャリーの不自然さについてそれに相当すると思われる例を以下にあげ、各々について論じよう。

1. 老水夫一行を乗せた船が迷い込んだ南極で、四囲をとりかこむ氷が、陶器やガラスの割れる音、犬の遠吠え、遠雷の音という様々な onomatopoeia で表現されるが、いかにもこじつけられた感じがする。

The ice was here, the ice was there,

The ice was all around:

It cracked and growled, and roared and howled,

Like noises in a swound !

(part I)

老水夫一行は、氷の壁に閉じこめられて身動きができず、はじめて自然からの脅威を受ける。氷の放つ音は“cracked” “growled” “roared” “howled” 等の onomatopoeia で表現され、多少こじつけの印象も強いが、これらの不気味な音が、老水夫一行を不安の極限に駆りたてるのであり、このパニックの最中、問題の信夫翁がひらりと舞い下りるのである。つまり様々な擬声音は、サスベ

ンスを盛りあげるのに効果を上げていると言えよう。

2. 海が、あたかも下水のように、腐敗と関連づけられているのは、こじつけの印象が強いと思われる。

The very deep did rot: O Christ !

That ever this should be !

Yes, slimy things did crawl with legs

Upon the slimy sea.

(part II)

この不可解な自然の異常現象は、老水夫が信夫翁を殺害し、罪が発生した直後の出来事である。鳥を殺す以前は、老水夫は自分を取り巻く自然と自分との関係に無自覚であった。それは、たとえ魔性の潜む自然の中にあっても、老水夫が、幼児のように無心に生きることが可能であることを意味すると言えよう。しかし、鳥は殺すことで老水夫に自覚が生じ、ここに彼と自然とは分裂し、敵のように争うようになったと言えるのではないか。W. Blake は “Where there is no man, nature is barren.” (“Proverbs of Hill”)⁶ と述べているが、これは、無心を失った人間の目にうつる自然が、そのままの姿と一転して「不毛」にうつることを表現したものと考えられとる思う。これは、そのまま老水夫と海との関係にあてはまるのではないだろうか。つまり、海の腐敗は、無心を失った老水夫の目にうつる自然の不毛を示しているのである。

3. 乗組員達の死体に一群の天使が入り、船を動かすが、天使と死体の結びつきは唐突に思われる。

‘I fear thee ancient Mariner !’

Be calm, thou Wedding-Guest !

Tw’as not those souls that fled in pain !

Which to their corpses came again,

But a troop of spirits blest:

(part IV)

死体が呻き、起き上がる光景はゴシシズム的で恐怖を喚起させる。これは、死体に天使が入ったためだが、天使は“Angel”ではなく“spirit blest”と表現されており、これもキリスト教に限定されず、大自然の背後に存在する神が働きかける救いの力を意味するのではないか。老水夫の悔心が深まるにつれて、神の救いの力も大きくなるのであり、神は死体をも利用して救いの手段とすると言えるのではないか。

4. 呪いが解けた直後、老水夫は、以下のように悪魔に追いかけてるのを知っているので、後をふり向かず、ひたすら前を向いて歩く人に喩えられる。救いを目前にした老水夫が、再び苦しみの世界につれ戻されそうであり、このsimileは不自然であるように思われる。

Like one, that on a lonesome road

Doth walk in fear and dread,

And having once turned round walks on,

And turns no more his head:

Because he knows, a frightful fiend

Doth close behind him tread.

(part IV)

たしかにその通りだが、このすぐ後に“*But soon there breathed a wind on me.*”と春のそよ風がやさしく老水夫のほおにふきつけ、彼の帰還を祝福するようである。ここから、先のsimileは、救われたと思うものの、これまでの苦しみを忘れることができず、いつまた苦しみに教われるかも知れないという恐怖心を表現したものではないだろうか。アベルを殺し、地上の放浪者となったカインは、エデンの東のノドの地に住むが、彼の罪が宥されたかどうかは、は

っきりしない。これに対し、老水夫は再び故郷に帰還し得たのであり、彼の救いは確かと言えよう。

(結び)

これまで Wordsworth の批評を参考にこの小論を進めてきた。花鳥風月を愛し、自然をあるがままに歌う Wordsworth にとって、アラビアン・ナイト・ゴシック小説に耽溺し、ユニテリアンの傾向をもつ Coleridge のこの詩を理解することは、当時の読者と同様に、困難なことであったと思われる。仮に Wordsworth の指摘する欠点があるにしろ、この詩の中で Coleridge は当時の教条主義に堕したキリスト教を揶揄し、キリスト教の枠を超えたもっと広い宗教感、自然感を展開したのであり、一人の老水夫と一人の若者の精神的再生を歌い上げたのである。Coleridge は、彼の *Biographia Literaria* 第14章で、Wordsworth と話し合ったが結果、彼は、超自然的なできごとを扱い、しかもそれを真実と感じさせる詩を書くことにした、と述べるが⁷、“The Rime of the Ancient Mariner” はその意図を現実させた作品であると言えるのではないか。

〔注〕

“The Rime of the Ancient Mariner” の引用文は、すべて *Coleridge, Poetical Works*, ed E. H. Coleridge, (1912; rpt. Oxford: Oxford univ. Press, 1969) による。

- 1) John Livingston Lowes *The Road to Xanadu: A Study in the Ways of the Imagination*, (Princeton: Princeton univ. Press, 1986), p.475.
- 2) *The Table Talk and Omniana of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Coventry Patmore (Oxford, 1917), p.106
- 3) *The Complete Works of S. T. Coleridge*, ed. W. G. T. Shedd, (New York: Harper&Brothers, 1968), Vol. II, pp.144-5
- 4) Cf. Frances Ferguson, “Coleridge and the Deluded Reader: *The Rime of the Ancient Mariner*”, in *Modern Critical Interpretations, Samuel Taylor Coleridge's “The Rime of the Ancient Mariner”* ed. H. Bloom, (Chelsea House Publishers, 1986), p. 73.
- 5) *The Complete Works of S. T. Coleridge*, Vol. II. p.145 および、Basil Willey, *Nineteen Century Studies: Coleridge to Matthew Arnold*, (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1949), pp.27-32 を参照のこと。
- 6) *Complete Works of William Blake*, ed. G. Keynes, (London: Oxford Univ. Press, 1969), p.152.
- 7) *Biographia Literaria*. ed. J. Shawcross, (2vols., London: Oxford Univ. Press, 1965), II, pp.5-6